2Ia-5

有松絞りに関する一考察

○川井裕里江　藤居眞理子
（東京家政学院大）

【目的】有松での現地調査を主として、歴史的背景を追いながら、有松絞りのあり方、そして途絶えてしまった絞り技法について考察する。
【方法】有松絞りの現リーダーといっても過言でなく、世界に向けて絞りを発信させようとしている有松絞り創始者・竹田庄九郎の子孫である竹田耕三氏を縦軸にし、途絶えてしまった技法の復元に取り組んでいる榊原あさ子氏を横軸に据え、聞き取り調査を行う。また、代表的な絞り技法について修得する。
【結果】江戸時代には分業による量産によって栄えてきたが、需要が減少した現在では、分業ということが逆に技法の保存を困難としてしまい、これまで築き上げてきた染色文化が永久消滅してしまうという兆候が既に見られている。技術を保存するためには、分業から個人による制作に変換する必要があるのではないか。それには今日までその存在が表舞台に登場しなかった職人の名前を明示することで、若い担い手に魅力ある職とする必要がある。また絞りはしぼのある質感が特徴としてあげられるので、『絞り＝しぼ』という見方をし、しぼをいかに多方面で生かしていくことが出来るか考えるべきである。多くの場合しぼは伸ばしてしまうので、しぼの美しさを殺してしまっている。これを有松絞りの伝統的な技法によるしぼの風合いをそのまま生かし、しぼそのものを模様と同様に商品化していくべきである。出来上がったもの全てを立体造形物という点で見直し、衣服以外の分野にも取り入れていくべきであると考える。